

吉田松陰自賛肖像 (中谷本) 解説

吉田松陰自賛肖像は、安政6年（1859）5月、江戸護送の幕命を受けた松陰が、旅立つ前に、吉田家・杉家と門下生の品川弥二郎・久坂玄瑞・岡部富太郎・中谷正亮の四名に、形見として与えたものである。本図は、このうち、中谷正亮（1831—62）に与えた一幅。

自賛肖像の作成を発案したのは久坂玄瑞、肖像の筆者は門下生・松浦松洞（亀太郎）、松陰の自賛は小田村伊之助（楫取素彦）の依頼によるものであった。松陰の自賛肖像は6幅作成され、そのすべてが残っている。完成順は、吉田家本・杉家本が最初で、この中谷本が最後である。このほかに、松陰の自賛のみのものが2幅作成され、そのうち1幅（福川本、萩博物館蔵）が残る。

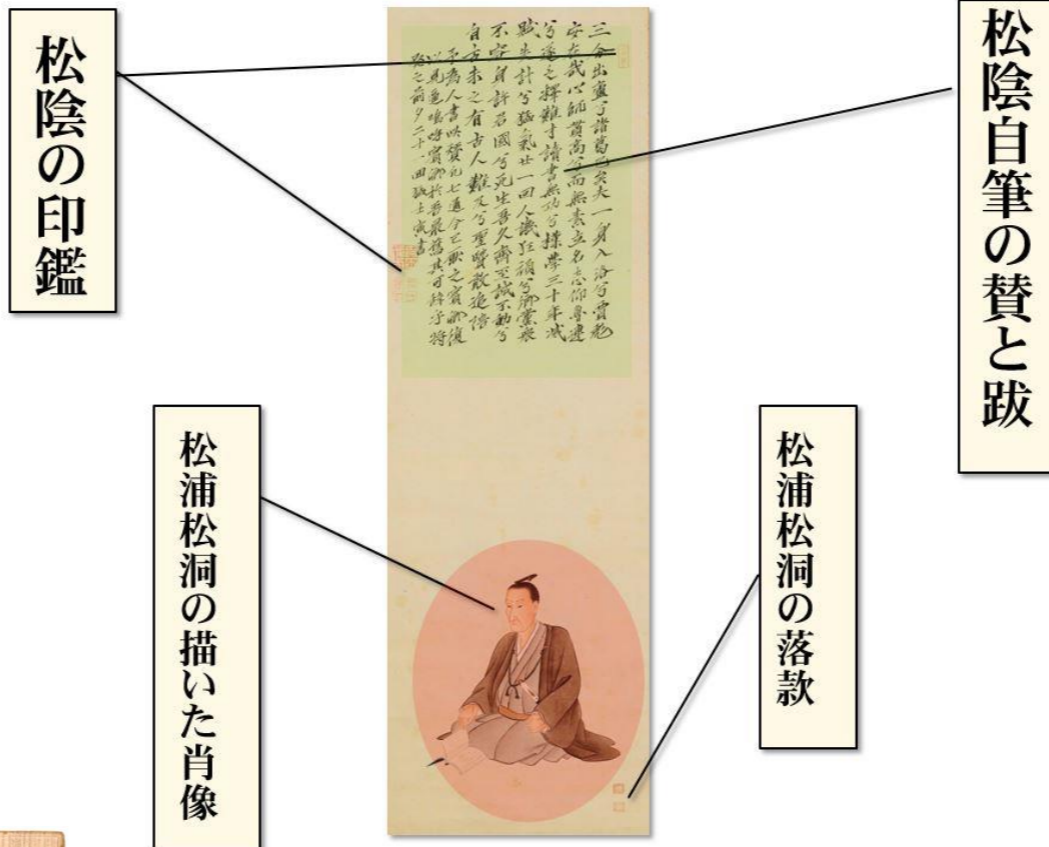
中谷本の作成経緯は、松陰が本図の跋に記している。松陰は、すでに自賛を七幅書いており、もう十分と思っていたが、旧知の中谷の懇願に応じた。時あたかも松陰が江戸へ旅立つ前日の夕方であった。

羽織を纏い、脇差を差して正座し、右手で書物を捲る姿を描く。この構図は、中谷本・杉家本・品川本に共通している。

肖像の右下に筆者・松浦松洞の落款（「松洞」、「聴鶴」）がある。自賛肖像の中で、松洞の落款があるのは、本図のみである。印は、吉田家本・杉家本と同じく、関防印に大きめの「日夕佳」、落款に「吉田矩方」「子義氏」を捺している。

賛は、杉家本と基本的に同文だが、杉家本が「身許家国兮死生吾久齊」であるのに対して、本図は「身許君国兮死生吾久齊」である。「家国」とするのは、吉田家本・杉家本・久坂本・岡部本で、「君国」は品川本・中谷本である。なお、本図は、徳富猪一郎著『吉田松陰』（1942）の口絵に載るが、『吉田松陰遺墨帖』（山口県教育会、1978）には掲載されていない。

木箱の表に「吉田松陰先生自賛肖像 野村靖書（印）」の墨書がある。軸に外題はないが、表紙に「岑堂（しんどう）文庫」の朱印がある。このほか、桂太郎（1848—1913）から、桂内閣の内閣書記官長や文部大臣を務めた萩出身の柴田家門（1863—1919）へ宛てた書簡が付属している。これから、本図が中谷正亮から甥の桂太郎の手に渡り、さらに柴田家門に譲られたことがわかる。前出の「岑堂」は、柴田の雅号である。



吉田松陰自賛肖像(中谷本) 山口県立山口博物館蔵

吉田松陰自賛肖像とは

安政6年(1859)5月 松陰江戸送りの幕命



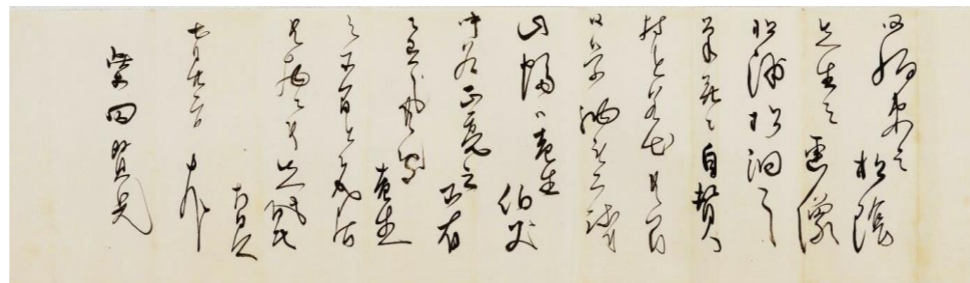
旅立ちを前にした5月16日～24日の間に

松陰門下の松浦松洞が描いた肖像に、
松陰が自賛したもの

※安政6年(1859)10月27日 江戸伝馬町で処刑



納箱



桂太郎書簡 柴田家門宛

〔賛〕
三分出慮兮諸葛已矣夫、一身入洛兮賈彪安在哉、心師貫高兮而無素立名、志仰魯連兮遂乏積難才、読書無功兮樸学三十年、滅賊失計兮猛氣廿一回、人譏狂頑兮郷党衆不容、身許君国兮死生吾久齊、至誠不動兮自古未之有、古人難及兮聖賢敢追陪

〔跋〕
予為人書此賛凡七通、今已厭之、賓卿復以見逼、嗚呼賓卿於吾最舊、其可辞乎、將發之前夕 二十一回猛士寅書（印）（印）

〔肖像落款〕
「松洞」（白文方印）、「聴鶴」（朱文方印）

〔訓読〕
〔賛〕
三分慮を出づ、諸葛やんぬるかな、一身洛に入る、賈彪安くにありや。心は貫高を師とするも、而も素より立つる名無く、志は魯連を仰ぐも、遂に難を釈くの才に乏し。読書功無し、樸学三十年、滅賊計を失す、猛氣二十一回。人は狂頑と譏り、郷党衆く容れず、身は家国に許し、死生吾久しく齊うす。至誠にして動かざるは、古より未だ之れ有らず、古人及び難きも聖賢敢えて追陪せん。

〔跋〕
予人の為に此の賛を書す、凡七通。今すでに之を厭す。賓卿（中谷正亮）復もつて見ることを逼る。嗚呼、賓卿吾において最旧なり。それ辞すべけんや。將に之を發せんとするの前夕。

